

阡陵

No.12

関西大学考古学等資料室彙報

昭和60年11月1日発行



高坏形土器(大阪府藤井寺市国府遺跡出土・重要文化財)

目次

牲幣を埋める祭—古代中国の場合—	2
ウイルッタ族の文様	4
大阪の生んだエジプト学者	6
乾隆南巡と日本—船載資料を中心として—	8
東京学士会院創立時の会員	10
近畿の美術館・博物館施設—企業博物館について—〔2〕	12
関西大学考古学等資料室彙報『阡陵』目次	14
考古学等資料室紀要第2号目次その他	16

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06—388—1121)

牲幣を埋める祭—古代中国の場合—

横 田 健 一

古代中国人は祭祀の対象によって、祭り方を色々と変えた。『周礼』は、周代の官職制度を記した礼の書物とされているが、果して周代の制度を忠実にしるしたものか否か、疑問がある。しかし、戦国から漢代に周代の制度を理想化して、これを官職制度の模範として、描き出したように思われる。そうした点を顧慮したとしても、周代の制度ないしは、その伝統をひく、中国中古の祭祀制度をうかがう史料となし得るであろう。

『周礼』巻18「宗伯礼官之職」大宗伯の条によると、「昊天上帝は禋祀をもって祀り、日月星辰は実柴をもって祀り、司中、司命等の星や風師、雨師（風や雨の神）は禋燎をもって祀る」としている。このように天帝をはじめ、日月星辰や、特に重要な司中、司命のような人間の運命を司る星、また風雨神は、柴を積み、焚き、犠牲の獣や玉や帛のような幣帛、祭物は火で燃やして、煙を立ちのぼらせて、祭りを行ったのである。

これに対して、前文の次に、「社稷と五祀五嶽は、血祭をもって祭り、山林川沢は埋沈を以て祭り、四方百物は、副辜を以て祭る」としている。

社、稷は土地の神と穀物の神で、血祭とは、むろん犠牲の獣をさいて、その生血を土地や穀物の神の木主（神体）または、その土地の上にそそいだものであろう。五祀五嶽のうち五嶽は、中国の東西南北と中央にある五つの高い名山で、東は泰山（山東省）、西は華山（陝省）、南は衡山（湖南省）、北は恒山（山西省）、中は嵩山（河北省）である。五祀は『礼記』月令によると、1年間に行う五つの祭、すなわち、春は戸、夏は竈、秋は門、冬は行（または井＝『白虎通』の説）そして季夏（6月）には中霤すなわち室中の神を祭ったとされる。ただし五祀は太古の五帝、または木金水火土の五行、五徳を指すともいう。四方百物の祭りは、犠

牲の獣の胸を裂き開いたのである。

さて問題は山林川沢の祭に埋と沈をもって祭るということである。すなわち山林の神霊を祭るには、犠牲・幣帛を地中に埋め、川や沢の神霊を祭るには犠牲や幣帛を水中に沈めるのである。後者については、日本でも奈良、平安時代に丹生川上神に旱の時には黒馬を、長雨の時には白馬を奉つて、降雨または止雨を祈った例は、多く見られる（六国史）。むろん馬の他に幣帛も奉られた。

中国の山川の祭で、更に興味深いのは、兵器をもって幣帛、祭器としたことである。すなわち『周礼』巻19「宗伯礼官之職」、肆師の条によると、この官の職掌は、大宗伯をたすけて国祀の礼を立てることにあるが、その中に、「およそ、師甸には牲を社に用い、宗には則ち位を為し、上帝には類造し、大神には封じ、兵を山川に祭ること、またかくの如し」とある。兵とは兵器、刀や矛、弓矢など攻撃用の武器である。

師甸（田に同じ）とは、軍隊を戦争に出動させることと、狩猟をすることで、狩猟は軍隊の平時における演習の意味があった。このように軍隊を動員する時には、社—土地の神に犠牲をささげ、宗廟には天子が参拝し、上帝に対しては郊祀を行う。すなわち天子が夏至ならば北郊で、冬至ならば南郊で天を祭るのが郊祀、類礼である。大神を封ずることは、社の神と五方の神に壇を設けて祭ることである。そして特に興味深いのは、山川は軍隊の依り止まるところであるから、兵器を奉つて祭るのだという。

前にみたように、山川の祭には、犠牲や幣帛、祭器は埋めるか沈めるかするということであるから、山の場合には、兵器を埋めたことになるのではあるまいか。

前述の「血祭を以て社稷五祀五嶽を祭り、狸（埋）

沈を以て山林川沢を祭る」の条の注に「地を祭ると言わざるも、これ皆地祇なり、地を祭ること知るべきなり。」地祇はすなわち大地の神で、山川の祭について、『周礼』『考工記』の玉人の条に、天子の巡守、すなわち国内巡行の際行われる祭に、璋と呼ばれる玉製の酒器を使用することが記されている。「大璋中璋九寸、辺璋七寸、射四寸…（中略）天子以て巡狩し、宗祝以て馬を前む」条の注に、「三璋の勺、形圭瓚の如し。天子巡狩し、事山川に有らば、則ち灌を用う」天子が全国を巡る時に、山川を祭るのに四角い玉を半分に分った柄のついた、（射とは柄のこと）で酒を尊から汲んで、山川に灌（そそ）ぐのである。次いで「大山川には大璋を用い（璋に）文飾を加うるなり。中山川には中璋を用い、文飾を殺す（飾らない）なり。小山川においては、辺璋を用う。これは半ば文飾するなり。それ沈を祈るに馬を以てす。宗祝（宗廟をつかさどる祝＝神官）勺（杓）を執り、先の礼を以てす。玉、大山川を過ぐれば、則ち大祝、事を用う。将に事四海山川に有らんとすれば、則ち校人は黄駒を飾る。」とある。

黄駒を飾って、川に犠牲として沈めるのであろう。

前条から二条を置いて「牙璋、中璋七寸、射二寸。厚さ寸、以て軍旅を起して又旅し以て兵を治め守る。」とある。旅は軍の単位であるがここでは山川、特に山を祭る祭祀をいう。軍隊を出動させる時にも、山神に酒を灌ぎ祭り、兵器を治めととのへて守った。というのである。

その三行後には「兩圭五寸、邸あり、以て地を祀る。以て四望に旅す。」とある。これは四角い玉の五寸の長さのものの、四隅に邸、すなわち突出のあるものを、地に埋めて、地の祇（かみ）を祭り、その後、四望（五嶽、四鎮、四瀆（かわ＝河川））に対し、遙かにのぞんで、祭を行った。というのである。

望の意味について、『尚書』の「禹貢」篇の、「蔡蒙旅平」を孔安国の「伝」（注釈）に「山を祭るを旅という」とあり、『論語』「八脩」に「季氏旅於

泰山」の「集注」に「礼、諸侯、封内の山川を祭る」とあって、旅も望も山川、とくに山を祭る意味がある。なお四鎮の鎮は、毎州の鎮めの山で、『尚書』『舜典』の孔安国の注に、「毎州名山、殊に大なる者、以て其の州の鎮を為す」とある。

山川の祭に特に興味の深いのは、祭の舞に兵器を持って舞うことである。

『周礼』『宗伯礼官之職』楽師・条に「凡そ舞に輶舞有り、羽舞あり、皇舞あり、旄舞あり、干舞あり、人舞あり」とある。輶舞は社稷の祭や全部の全羽を持って舞う。羽舞は析羽すなわち割いた羽を持ち、皇舞の皇は鳳凰の意であるが、五彩の羽で作った帽子を冠って舞う。旄は牛の尾を持って舞う。干舞は楯をもって舞う。人舞は素手で何も持たず、宗廟で行う手ぶりの舞である。

この干舞こそは、「山川には干を以てす」と注するように、山川の祭には楯をもって舞ったのである。わが崇神紀九年三月条に、天皇の夢に神人がおしえて「赤盾八枚、赤矛八竿をもって墨坂の神を祀れ、黒盾八枚、黒矛八竿をもって大坂神を祠れ」とあり、四月にこの教のように黒坂、大坂の雨神を祭ったとある。これは大和の原初の皇室領の東境の宇陀墨坂、今の榛原では、日の出の方なので赤色の兵器、大坂は、皇室領の西方、日没の方角なので、黒色の兵器を、おのおの坂の神にたてまつって祭を行ったのである。こうした記事の成立は、何を史料にしたか不明だが、崇神時代に、古代中国の兵器を以て山神を祭る思想が入っていたか、あるいは『書紀』編者に、古代中国の山神の祭に兵器を用いたとの思想の影響があったのか。いずれにせよ山神に兵器を埋めて祭ったのであろう。

なお、日本でいえば、今年四月に橿原考古学研究所附属博物館で催された伊勢神宮神宝展に、出陳された、鎌倉時代と室町時代の二振の玉繩太刀は、地中から出土したものであった。祭が終わってから埋められたものと推定されている。

ウイルッタ族の文様

網 干 善 教

去る6月の中旬、昭和60年度、考古学資料室の調査として、オホーツク海沿岸の遺跡、遺物の調査と博物館施設見学のため巡検する機会があった。

その際、網走市立郷土博物館に展示されていたアイヌ文化関係の資料のなかに注目する展示物があった。それは同館の『収蔵資料目録(民族編)』に

(Ⅰ) 整理番号31-463、E-40、資料名「皿敷」計測値、円形直径25.0cm、収集地 樺太・オタス(挿図参照)。

(Ⅲ) 収蔵番号E-39、資料名「皿敷」、計測値、円形直径30.0cm、収集地 樺太・オタス。

(Ⅱ) 収蔵番号E-1030、資料名「皿敷」計測値、L21.2cm、収集地 網走。

と記入された布製の皿敷であり、ここに取上げようと意図するのはその皿敷に織られた文様のことである。

皿敷というのは、皿を置くために敷く20~30cm位の一枚の布であるが、同館の米村氏によれば、これらの皿敷はウイルッタ族の後裔が伝統的に復

原製作した織物であるとのこと。ウイルッタ族とはオロッコ人で、オロッコは「ウイルタ」または「ウイッタ」と呼ばれているが、彼等自身は「ウイルッタ」と称している。

「オロッコ族」あるいは「オロッコ人」と称される民族は現在は極めて少数になったといわれるが、一説によると古アジア諸族の一支族であるといわれてき、また、最近の見解では北方トウングースの支族ではなかろうかともいわれている。この民族はトウムイニ川、ハデイ川、コピ川、デ・カストリ湾沿岸など沿海州一帯に住んでいるとのことである。

さて、私が関心をもった彼等の伝統的な皿敷の刺繍の文様は、中心に円形または四花文形の文様を置き、それを中心に八等分して周囲に心葉形乃至は蕨手文形の文様を配するものであって、いわば八分割の対称文様をあしらっている。そこで考えられるのはこの種の文様がオロッコ族と呼ばれるウイルッタ族に、何時、どのような経緯で伝わったのかという疑問である。なぜなら、中心文を置き、八分割して心葉形の対称文様を配する構成の図案は中国においては唐文化を象徴するものであり、その文化の影響をうけた西域や朝鮮、さらには日本でも盛んに使用された図形であると思うからである。

1972年3月、飛鳥高松塚を発掘調査した際、石槨内から金銅装の飾金具が出土した。この飾金具は恐らく一対をなすものであったと思われるが、片方は盗掘者によって持ち去られたらしく、石槨の南側石付近の隅にあった一個だけを検出した。石槨内には漆塗木棺が安置されていたし、飾金具の出土位置からみて木棺の木口面に付けられてい



皿敷(網走市立郷土博物館蔵)

大阪の生んだエジプト学者

加藤 一 朗

本屋さんの肩をもつつもりではないが、昭和10年前後に刊行された平凡社の『世界歴史大系』はわが国の歴史学研究史上1つのエポックを画したもののといっても過言ではないであろう。わが国としては新しい諸分野について定本的な叙述がそのなかに含まれているからである。西洋史に關していえば、杉 勇の「アッシリア史」、石橋智信の「ヘブライ史」、濱田耕作の「エーゲ文明史」（實際は村田數之亮の執筆ときく）、岡島 誠太郎の「エジプト史」などがそれである。ここにいう、「大阪の生んだエジプト学者」とはいうまでもなくこの岡島誠太郎のことである。同時に彼は日本の生んだ最初のオーソドックスなエジプト学者であった。彼の研究はほとんど独学といって宜しいものであるが、当時のわが国の、『埃漢文字同源考』（昭和8年刊行、本学図書館にも1部おさめられている）の著者板津七三郎らによって「漢字はエジプト文字から派生した」というようなことがまじめに論議されていたような環境のなかで、ひとりオーソドックスな道を進んでいたということは特筆にあたいする。それかあらぬか上記「エジプト史」は戦後復刻されて、今日いやましにふえつつあるエジプト研究者のあいだでも高い評価をえている。ちょうどH. J. ブレストッドの「エジプト史」（英文）が、くりかえし復刻されているように。

岡島（明治28年生、昭和23年没）の生涯をふりかえると、孤軍奮闘の感が深い。大阪のおもにガ

ラス製品をとりあつかう貿易商の家に生れ、中学から大倉高商に進み、卒業後家業をつぎ、いちぢるしく商才を発揮した。しかし同時に向学の心

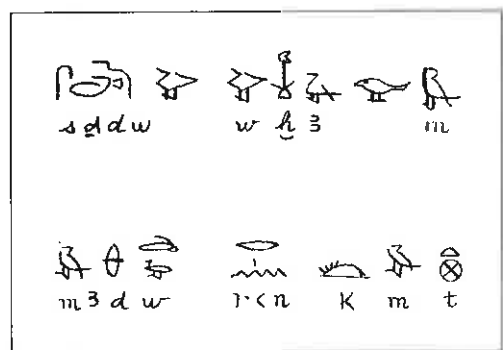


研究中の岡島誠太郎

やみがたく、何がきっかけであったかは、今日となってはたしかめようがない。しかしとにかく、縁故をたよってイギリスにわたり、おもに大英博物館などを利用して、約1年勉強にはげんだ。また渡英の途次エジプトの現地を訪れたことも充分考えられる（『昇龍No.11のなかの拙稿「木村健助先生とエジプト」の項参照）。岡島のこのような生きかたに、親戚一同はこぞって反対したという。父だけが味方で相応の援助を惜しまなかったらしいが、岡島の商人としての才能を高く買っていただけに、ほかの後継者を養成していなかったために、家業はつぶれてしまった。

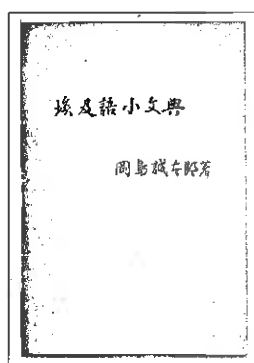
帰国後京大西洋史学科の選科生となり、のち本科生に変わり、卒業は昭和2年である。同期生のなかには本学名誉教授であった故原弘二郎や、本学に多年非常勤講師として出講していた猪谷文臣がいた。しかし、岡島は他の学生よりも10才ほど年長で、すでに妻帯もしていたので、いわゆる、オンケル（オジちゃん）であり、あまり同期生とのあいだにつきあいはなかったらしい。しかし主任教授の坂口昂には目をかけられ、卒業後しばらくして奈良女高師（現奈良女子大）の教授に就任する。何年間か非常勤として京大にも出講している。おなじころ京大非常勤講師であった上記村田とのあいだにはかなり親交があったらしい。筆者も両者の講義の受講者のひとりであったが、岡島の講義のテーマはエジプト史ではなくイスラム史であった。

しかしこの間に岡島は騰写印刷によって『埃及語小文典』（以下Aと略称）と『こぶと語小文典』

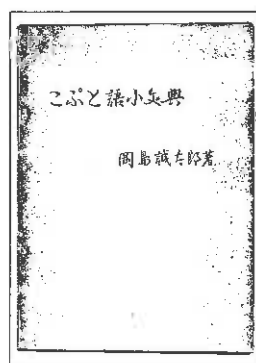


岡島誠太郎筆跡

(以下Bと略称)とを刊行している。(Bの表題のなかの「こぶと」については阡陵No.9のなかの拙稿「コプト人のランプ」を参照されたい。)Aは、「中期エジプト語 (Middle Egyptian)」をとりあつかったものである。今日でも中期エジプト語とコプト語の研究がエジプト学の基礎となっていることを思い合わせると、岡島が独学でこのことを見ぬきAB両文典を刊行したことは特筆にあたいする。Aの執筆はA. エルマンの『エジプト語文典』(独文)によっている。それはそれで正しい方法であったが、長いあいだエジプト学のバイブルとされてきたA. ガーディナーの『エジプト語文典——中期エジプト語への手引き』(英文)を参考にしなかった点は少しく奇異な感じをうける。岡島の研究時代にこの文典はすでに刊行されていたはずであるが、Aのなかにこれを用いた形跡はなく、また筆者の調べた限りでは岡島の蔵書のなかにこの書はふくまれていなかったようである。それはともかく、岡島には生前エジプト学上の弟子がなかったらしく、そのことが淋しくて、晩年の岡島はイスラムの研究に深く入りこんだものと伝えられている。ただ、私事にわたって恐縮であるが、戦後、そして岡島の没後、筆者は村田から、AとBとをおくられ、Aをひもといたことが、筆者がエジプト学に進むことになった、1つの大きなきっかけとなった。また筆者が「岡島文庫」(岡島の旧蔵書、京大図書館におさめられている)のなかのあれこれを探っているうち、イギリスの著名なエジプト学者バッジの『ミイラ (Mummy)』(英文)の巻末に鉛筆書きの岡島の手で「種々教えられるところがあったが、どうも一貫性のないのが残念である」といういみのことが記されていたのは印象的であった。バッジはたしかに偉大なエジプト学者であり、——学界にもナショナリズム的な要素もあって——イギリスではとくにもてはやされ、その龐大な遺著はくりかえし復刻されているのであるが、どうも多く書きすぎたきらいがあり、玉石混淆の感はぬぐいえない。最近ではイギリスでもエジプト学者のなかに、「バッジのものは年々多数復刻され、依然多くの読者をえている。このことは残念なことであるが、どうしようもない」とってはばからないものも現れている。岡島がバッジに批判的であったことは卓見であったといえよう。



エジプト語文法書



コプト語文法書

晩年の岡島は、奈良女高師でおそらく西洋史一般について講じていたが、他方において、熱心なクリスチャンであった彼は、戦後食料事情のいちじるしくわるい時期に、奈良のキリスト教会のためにあまりにも熱心な活動をつづけていたことが命とりになったともいわれている。このような岡島の生涯を大阪文化の伝統のなかでどのように位置づけるべきかは、筆者の任をこえることであるが、とにかくそれは開拓者の生涯であった。月給を大巾にさいて文献購入にあてていたらしく、「父の研究は、私どもの家庭にあって、かなりの負担でした」とは息女汀子(現姓加久間)の述懐である。この汀子は少女時代、長広敏雄(考古学者、京大名誉教授)にピアノを習い、汀子の息女たちのひとりとは音楽の道に、ひとりは絵画の道に進み、現在ともに滞欧中ときく。岡島の血のなかには、商人と学者・芸術家との2つのものがともに流れていたといつてよいであろう。

本稿には酒井傳六の『エジプト学夜話』のなかの「日本のエジプト学」についての叙述と多少重複するところがあるかも知れない。しかし、同氏のこの項の執筆に際しては、筆者も種々資料を提供しているので、この点に関しては、同氏と読者諸士のお許しをいただけるものと思う。なお岡島の上記外の著作・論文については、学術季刊誌、「西洋史学・Ⅲ」のなかで、村田が、岡島の遺稿「古代エジプトの個人的一断面—第三王朝の性格—」とならんで「岡島誠太郎氏著作目録」を載せているので、ここでは割愛する。

(本文中敬称・敬語省略)

乾隆南巡と日本一船載資料を中心に一

松 浦 章

徳川8代将軍吉宗の命により『大清会典』の翻訳に従事した深見新兵衛（有隣）が、「巡幸とは天子自から諸國を巡検したまひ、國の風俗、政事の善惡を正さるをいふ」①と記しているように、清代において巡幸は数々おこなわれ、ことに康熙帝の東北や江南への、また乾隆帝の江南への巡幸が有名である。とりわけ乾隆帝の南巡はその治世（1735～95年）の間に乾隆16、22、27、30、45、49年と6次②にわたり江蘇・浙江方面への巡幸がおこなわれており、毎次の日程は正月中旬頃から四月末か五月初に帰京する③という4ヶ月余を要するものであった。

乾隆南巡内、前4次については『南巡盛典』によって、その状況が知られ、全6次のそれは左歩青氏の詳細な研究④がほぼその全容を明らかにしているが、清朝皇帝の壮大な行幸はひとり中国のみならず、日本においても関心が持たれたようである。その例として長崎へ船載され

た乾隆南巡の資料の一端をここに紹介してみたい。

我国に残された乾隆南巡に関する資料の一つに「乾隆帝幸道圖」と題された抄録の資料がある。これは徳川の幕臣であった宮崎成身の編集した見聞雑録の『視聽草』⑤の中に見え、2編18集178冊に達する膨大な資料の第127冊、続3集第7に「乾隆帝江南省蘇州府遊幸街道圖」と「江南省蘇州府街道開店總目」及び略図とに分けて記録された全14丁ほどの資料である。

同資料の終りの部分に「鴛湖、程栄春、福唐、鄧元禄」とあり、その末に、

此圖往歲、漢客之所齎來也、丙辰之春、索而得之、使畫工臨寫、後邇后程・鄧之輩、語次及之、程云嘗親瞻南幸、正同此圖、乃使程記其事、且督儀仗式、於卷首以珍藏於正齋云

寛政八年三月 近藤守重藏

と記し、宮崎成身が近藤正齋（重藏）所蔵の写しにより記録したことが知られる。

近藤正齋は同図を丙辰年（嘉慶元、寛政8、1796）の春に画工に臨写させ、後に長崎において会った程栄春と鄧元禄にこのことを語ったところ、程栄春は乾隆帝の江南行幸を見たことがあり、この図と同様であったと正齋に語ったのである。福唐即ち福建省福清県の鄧元禄は寛政6年（乾隆59、1794）、同8年に長崎来航の知られる商人であり⑥、鴛湖とは浙江嘉興府南の鴛鴦湖を指すと思われ、同地の程栄春は不明であるが、当時長崎来航商人で著名な程氏は程赤城⑦がおり、彼は安永2年（乾隆38、1773）より文化8年（嘉慶16、1811）までの来航が知られ、栄春が赤城であるならば、赤城は安永2年に29歳であったから、全6次の乾隆南巡に出会った可能性があり、栄春は赤城の別名かと思われる。

乾隆南巡の図は徐揚が作画した『乾隆南巡圖』12巻が知られ⑧盛叔青の『清代画史』巻2に徐揚は「號雲亭、呉人、欽賜举人、官内閣中書、



図1. 總督（両江總督尹繼善）

善山水梅 亦蒼雅、供奉内廷、疊蒙睿題」とあるように乾隆帝の寵愛を受けた宮廷画家であったから、正齋が臨写させた「南巡図」とは徐揚作の写しではなかったかと推察される。

ところで、この図は何次の南巡を描いたものであろうか。総督の説明中に「總督江南江西等處、地方軍務、總理糧餉、姓尹名繼善者是也」と両江總督尹繼善の名が知られ、さらに両傍皇親大臣の項に「外戚忠勇傳恒、宗人輔國公恒祿、宰相史貼直」の名があり、上記四名がその位に該当する時期は乾隆22年（宝曆7、1757）である⑨から、この船載の南巡図は第2次の南巡を描いたものと考えられる。ついで、同略図中に見える両江總督尹繼善と侍衛の二図を掲げておく。同資料に「蘇州府城、係天下四民輻輳之所。（中略）巡街之日、勅令官民、瞻天顏、至于地方賣買・修造等事、如常所為、聽民之便」とあり、民衆には天子の巡行といっても特別の行事を強いたわけではなかったが、官吏の方はそうもいかず、例えば乾隆30年（1765）の南巡の時には、河南巡撫の阿思哈は、「今逢皇上翠輦、南巡路出、山左與豫省接壤、奴才恭伏首左、瞻仰天顏」⑩と記しているように、わざわざ河南から南巡経路の山東に行き乾隆帝に御目見得すると言ったことがあったのである。

最後に、「江南省蘇州府街道開店總目」について述べてみたい。同資料には25店に及ぶ商店が列記され、「第一店 公茂號、發各省紬緞紗羅。此紬緞店也。即係各省紬緞紗羅販賣之謂也」とあり、同書には店の図は無いが図中の各店に説明を加えている。これは正齋が程榮春、鄧元祿等から聞き、書き添えたものと考えられる。

この他、薬、茶、文房具、酒、塩干魚、両替、書籍、食堂、銅器、米、反物、菓子、煙草、酒館、餅、紙、扇、質屋、醬油、帽子、染物屋、仕立物屋、麵店、油店等の店が列記され、清代蘇州の商店の賑わいを知るのみならず、中国の社会経済史の資料としても有益であろう。全文の紹介は別の機会に譲りたい。

〔註〕



図2 侍衛図

- ① 大庭 脩教授編『名家叢書』中（関西大学東西学術研究所資料集刊12-2、1981年3月）406p、同書下の大庭教授解題参照。
- ②④左 歩青氏「乾隆南巡」『故宮博物院院刊』1981年第2期（5月）。
- ③ 『清史稿』卷11、12、14、高宗本記2、3、5。
- ⑤ 『視聽草』は内閣文庫所蔵史籍叢刊特刊第2として刊行中である。現在第九卷（続2集第2 1985年9月、汲古書院）まで刊行されているが、本資料は現在未刊。
- ⑥ 長崎市立博物館所蔵文書「販銀額配銅之数」。
- ⑦ 拙稿「乾隆時代の長崎来航中国商人—汪繩武・汪竹里・程赤城を中心に—」（『呷啞』10、1978年6月）8～11頁。
- ⑧ 壽崇正氏「清代歴史画巨作—「康熙南巡図」—」（『故宮博物院院刊』1981年第2期）79頁。
- ⑨ 錢 實甫氏編『清代職官年表』第1、2、3冊（中華書局、1980年7月）参照。⑩『宮中檔乾隆朝奏摺』第23輯（台北、1983年3月）610頁。

（1985. 10. 4記）

東京学士会院創立時(明治12年)の会員

角 田 芳 昭

神田孝平(1830~1898)の研究を続けている間に彼は明治12年東京学士会院(後の日本学士院)創立時7人のメンバーの1人であることを知った。神田は幕末の蘭学者、経済学者であり、明治の官僚政治家ともなった人であり、明治4年から5年間兵庫県令に任ぜられ、その後元老院議員に転出した。彼の蒐集した石器資料約3,000点が本学考古学資料室に所蔵されており教育研究に寄与している。また彼は明六社創立時代兵庫県通信員としても活躍しており、『明六雑誌』に9編の論考を寄せている。また考古学等にも趣味があり、人類学会会員ともなった。その後明治20年(1888)東京人類学会初代会長に推薦され就任した。このように彼は政治家、経済学者であり、また文化人でもあった。

そこで東京学士会院創立当時彼を含めた会員達とのいきさつなどについて記してみたいと思う。明治4年廃藩置県による官制改革の結果文部省が誕生し、近代的教育制度の確立を目指した。そして翌5年「学制」を公布し、西洋学術の移植普及に乗り出した。時を同じくして民間においても新しい文明開花の啓蒙運動が急速に起こりつつあった。その中心が森有禮の発議と西村茂樹の斡旋によって生まれた明六社であった。明治6年に設立の議が起ったので「明六社」と称した。主旨はもっぱら、学術と道德の問題であり、「我国ノ教育ヲ進メンガ為ニ有志ノ徒会同シテ其手段ヲ商談スルニ在リ又同志集会シテ異見ヲ交換シ知ヲ広メ議ヲ明ラカニスルニ在リ」とあり、社名、社員、定員、通信員、名誉員、格外員……役員、役員選挙法、辞社……」など19条を制定している。そして一時は

新思想の指導者としてはなばなしい活動を行なったが讒謗律の公布を機としてわずか1年あまりで活動を停止せざるを得なくなった。しかし他方文部省内においてもアカデミー設立論を起こし野村素介の設立案や教育令の制定、そして西南の役後政府の基盤が確立したことなど学士会院設立にはくしゃをかけた。

明治10年2月6日元老院議員であった神田孝平が文部小輔に任ぜられた。文部大輔田中不二麿の要請によるものと推定する。神田は明六社準社員であり、また法律にも精通していたので、特に請われたものと思われ、文部行政において東京大学の設立にも加わっている。そして文部大書記官野村素介が11年11月素案を提出した。

ここにおいて文部卿西郷従道は学士会院設立の必要を認め、文部大輔田中不二麿がその意を受けて12月9日田中の私邸において下記の7名を招き、東京学士会院規則大意及びその選挙法案を示しその意を問うた(下記諮問書参照)。

そして規約の大意を示し意見を徴している。

翌12年1月15日田中の名をもってこの7名を東京学士会院の会員に推薦する旨の通告があった。そして同日文部省内修文館において第1回の会議が行なわれ、福沢諭吉が選挙の結果会長に当選した。会院は毎月15日を例会と決めており、文部卿も最初は出席していたがやがて習慣化し、文部大輔、小輔の出席となりやがて小書記官などが出席するのみとなった。これは神田が文部小輔の地位にあり、学士会員と2役していたので、文部省側が出席する必要を認めなくなったのであろう。翌

教育ノ針路ヲ指點シ學術技
藝ヲ提擡セシコトヲ欲セバ宜ク學
士會院ヲ設ケ學德素アルノ士ヲ
會シテ互ニ其要務ヲ討議スルノ
所トナシ此一事ハ一クハ舉テハ國士ノ
文運ヲ振興シ人生ノ福祉ヲ増
益スルニ庶幾カシク請フ高見ヲ聞
ヒテ悵ハナカレ

明治十一年三月廿六日 文部卿西郷従道

西 周 居
加藤弘之君
神田孝平君
津田真道君
中村正直君
福澤諭吉君
箕作秋坪君
貴名にあらはせ候

あふふふふふふ

会員の略歴及び写真

12年3月会院の機関紙として『東京学士会院雑誌』が創刊され、当時のこれら最高の学識者の論文及び講演の趣旨が次々と発表されていくのであった。神田孝平には9編の論文・講演会の趣旨がある。

この学士会院はその後明治39年帝国学士院と改称し、終戦後の昭和22年12月日本学士院と改め新生日本の学術文化の中心となり、現在100有年の歴史を有します重きをなしている。詳細については本学資料室紀要第3号に執筆する予定である。参考文献『日本学士院八十年史』。



津田 眞道 (1829—1903)

岡山県出身、文化啓蒙学者、元老院議員、西周とフッセリングにつき学ぶ。



西周 (1829—1897)

島根県出身、哲学者、心理学者
明六社設立に参加、津田眞道と共にライデン大学でフッセリングにつき法学を学ぶ。



中村 正直 (1832—1891)

東京都出身、洋学者、教育家、明六社設立参加
元老院議員、貴族院議員



加藤 弘之 (1836—1916)

兵庫県出身、国法学者、教育者、元老院議員、
貴族院議員



福沢 諭吉 (1835—1901)

大分県出身、啓蒙思想家、教育家、明六社の設立参加、慶応義塾創設



神田 孝平 (1830—1898)

岐阜県出身、蘭学者、官僚政治家、元老院議員、
貴族院議員



箕作 秋坪 (1825—1886)

岡山県出身、蘭学者、明六社設立参加、高等師範学校の基礎を築く。(津山洋学資料館蔵)

近畿の美術館・博物館施設 ―企業博物館について―〔2〕

歴史は現代を映す鏡であるといったのは、東洋のある賢人の言葉である。その歴史を視覚により語りかけるのが博物館である。

日本も工業化が進められて以来約1世紀、工業社会といわれるようになった。あるいは産業社会といわれる。これらの社会を反映して近年企業における博物館、資料館設立が様々に進んできた。そこで今回は企業の発展、発達の歴史を展示した博物館を紹介してみたい。

電器、食品、農林業、紙、繊維、エネルギー、鉱工業、機械、化学工業など諸分野の産業において博物館施設が付設されており、文化、社会教育及び産業技術に寄与している。

「松下電器歴史館」は松下電器創業50周年を記念して、昭和43年開館されたもので20年近くの歴史を有し、会社の発展過程が一目で理解できるよう展示されている。先ず館内案内板があり、創業前の松下幸之助の歩みより創業からその歴史を伝える展示ルタムがあり、続いて松下グループの現況紹介がされている。廻遊式になっており、照明等



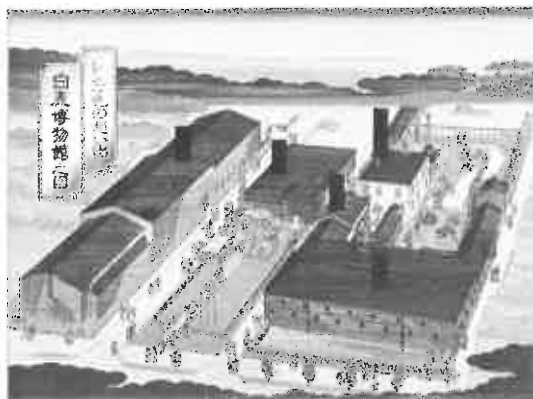
松下電器歴史館

〒571 門真市大字門真1006

☎06-908-1121

も行き届き、展示の妙を得て電器の世界へ引き入れてくれる。独立した建物であり、博物館施設としては理想的である。今後は世界の松下として、家電業界のリーダーとして一企業というわくを越え電器産業界が一目で理解できる日本の電器博物館とでもいわれるものを付設していただけたらと願うものである。

「白鹿記念酒造博物館」は酒造業として300年の歴史を有し、その酒造りの歴史を後世に正しく伝えることを目的として昭和57年に設立された。清酒「白鹿」の辰馬本家酒造株式会社は寛文2年(1662)



白鹿記念酒造博物館 (イラスト)

〒662 西宮市鞍掛町 8-21

☎0798-33-0008

に創業され、320年余の歴史を有し、清酒業界の老舗です。記念館、喜十郎邸、酒蔵等の施設があり、それぞれにユニークな展示がなされている。記念館は開館当時に建築されたモダンなタイル張りであり、1階に3展示室、2階に展示室、講堂、会議室等があり、特別展示と講演などが催されています。喜十郎邸は日本人大工による最初の洋館建築と伝えられ、注目すべき建物で兵庫県の重要有形文化財にも指定されています。酒類を販売していた「帳場」があり、そして酒蔵があり、昔の酒づくりがひと目で理解できる。洗米、蒸米、放冷工程、酛仕込み、麴仕込み、滓引、火入などの工程を数々の酒造用具や作業人と立体的に復原し展示している。また展示目録等も発行されている。

「竹中大工道具館」は竹中工務店が創立85周年記念事業として昭和59

年設立したもので、同社の歩みやPRなどの企業色はいっさいなく、純粹にわが国の大工道具の資料を系統的に展示しており、ユニークな博物館として注目にあたいする施設である。

1階の展示テーマは「道具の歴史」であり、古代の石器から現代の電動工具に至るまでの大工道具



竹中大工道具館

〒650 神戸市中央区中山手通4-18-25

☎078-242-0216



サントリー・ビール博物館—桂ブルワリー
〒000 京都府長岡京市調子3-1-1

☎075-922-5770

の発達変遷の経過が時代を追って展示されている。2階は「木と匠と道具」であり、木材資源の種類と分布、工匠の技、古材、古文書、絵巻物などで解しやすく展示されている。道具の作り方や使い方を紹介しているビデオコーナーも併設されている。3階は「道具と鍛冶」がテーマで、製材から加工、仕上げに至るまでを展示し、名工が鍛えた作品の一部が展示されている。収蔵品は約10,000点に達すると聞く。

近年は「イギリスの木工具展」など特別展を開催したり、土木建築に関する特別講演会も開かれており、社会教育に寄与している。展示にも工夫がなされており、将来も期待される博物館である。

「サントリー・ビール博物館——サントリー桂ブルワリー——」

はサントリーが製造しているウイスキー・ワイン等全国18工場のうちの1つ桂ブルワリーにビール博物館が附設されている。麗わしきパブリシティガールズのお嬢さんに案内され館内を見学する。ビールの起源から伝播経路、ビールにまつわる逸話や各国の各時代のジョッキなどが展示

されている。立体的に見せるため模型資料が使われている。また工場周辺は古代長岡京のあったところで、工場建設当時に発掘された資料が展示されている。

次にビールの製造工程を見学する。製麦、仕込、発酵、貯酒、濾過、瓶（缶、樽）詰等を順次みて廻るうちに圧倒される。実に清潔で機械化されたコンベアの上を製品が流れていく。そして瓶詰にされたビールが手ざわり良く倉庫へと運びこまれる。工場そのものが博物館施設である。今後の発展が期待される。

またサントリーには山梨県へ本格的な「ウイスキー博物館」が設立されており、私企業のわくを越え、「世界の蒸留酒文化」

「日本の西洋歴史」の展示を行っており、1,300㎡に6つの展示室を設け、わかりやすく解説している。「カタログ」を見ているだけでも楽しい。一度は見学しておきたいものだ。「じゅらく染織資料館」は織物の街室町の中心地にあり、帯の製造・販売の「じゅらく」が43年春ビルを建てたのを機会に、この1階へ資料展示室をつくったのに始まる。200平方メートルのこじんまりした資料館だが、和装伝統産業の町らしく、諸々の織物が展示されており、中でも民族衣装の展示が目を引き。毎月1回の展示替をしておりメキシコの民族衣装には貴重な資料がある。また、若手作家による染色展なども行ない、若い人材を育てている。ユニークな資料館として今後の発展が期待される。

以上の他に多くの企業博物館施設があるが以下記名の博物館もユニークである。

- 島津創業記念資料館（京都市中京区木屋町通二条下ル 電話075-255-0980）
- 川島織物資料館（京都市左京区静海市原町265 電話075-741-3111）
- 沢の鶴資料館（神戸市灘区大石南町1-29-1 電話078-882-6333）
- 菊正宗酒造記念館（神戸市東灘区魚崎西町1 電話078-851-2275）
- うすくち龍野醤油資料館（龍野市龍野町大手54-1 電話07916-3-4571）
- 生野鉱物館（兵庫県朝来郡生野町小野 電話079679-2010）

最後となりましたが、資料を提供していただいた館に対し、感謝申し上げます。

その他公立の産業史に関する博物館が多数存在するが別の機会に紹介したい。

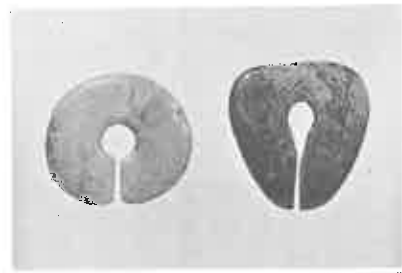


じゅらく染織資料館
〒602 京都市上京区寺之内通新町東入ル
☎075-441-4141

関西大学考古学等資料室彙報『阡陵』目次

関西大学考古学等資料室の発展と充実のため昭和55年資料室彙報『阡陵』が発行された。阡陵の由来は「本学の学生が愛唱する逍遙歌の一節に「名も千陵の丈夫が」とあり、大学の所在地「千里山」に因んだものである。「阡」は数字であると共に「ミチ」「墓道」という意味もある。「陵」は「ラカ」「ツカ」「ミササギ」であり、共に考古学に関連する。資料室の彙報にふさわしい表題であり、名付け親は横田健一運営委員長(文学部教授)である。「網干善教文学部教授解説」、以来6年この彙報も12号を数えるに至り、本学の教育研究と社会教育にも若干寄与したと考える。この阡陵についての問合せもあるので、ここに過去の目次を掲載することとした。

阡陵 No. 3



鏡状瓦輪 (京都文化財)

目次

ローロノバの考古学博物館・遺跡で考えたこと	2
〔E14〕新武蔵野の瓦葺瓦	3
本山寺・松と考古学 その3	4
板屋原(スエダ) メンフィス(秘跡山)	6
刀の手入れ入門	7
ヤンデス地帯山北の上野	8
新巻5年級調査報告「加山遺跡」上巻	10
資料室収蔵品紹介	11
編集後記	12

関西大学考古学等資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3の3の3 06-388-1121

阡陵 創刊号



【大学図書館4階】

目次

創刊号による「もの」を見直し	2
考古学資料の展示	3
松田平蔵について	4
阪神間文化圏と「土器」資料紹介	5
資料室の展示	6
関西大学考古学等資料室	8
ニュース	9
関西大学考古学等資料室	10
資料室収蔵品紹介委員会	11
編集後記	12

関西大学考古学等資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3の3の3 06-388-1121

阡陵 No. 4



人物輪 (京都文化財)

目次

鑑賞とスケッチ ローロノバの博物館・遺跡で考えたこと	2
デイル・スウィットの博物館	3
本山寺一跡と考古学 その3	4
オシリス小像	6
板屋原和太の博物館・遺跡について	7
河内国府遺跡の出土品	8
続インカ・マヤと鳥居の石像	9
バプア・ニューギニアの民族資料	10
資料室収蔵品紹介	11
編集後記	12

関西大学考古学等資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3の3 06-388-1121

阡陵 No. 2



石 鏡 (京都文化財)

目次

瓦物伝説	2
西條の博物館	3
「西条の博物館」日本大石蔵蔵	4
「西条の博物館」その1	5
博物館の展示	6
博物館の展示	7
「西条の博物館」その2	8
「西条の博物館」その3	9
「西条の博物館」その4	10
資料室収蔵品	11
編集後記	12

関西大学考古学等資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3の3の3 06-388-1121

阡陵 No. 5



銅鏡 (大泉町博物館蔵)

目次

関西大学博物館 (阪大) 設立について	2
インドの博物館	3
金石学館について	4
メソポタミアの博物館	6
近世史資料について	7
近世史資料の展示のことと、鑑賞	8
河内国府遺跡の出土品	9
「西条」による室内展覧	10
資料室収蔵品紹介	11
編集後記	12

関西大学考古学等資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3の3 06-388-1121

阡陵 No.6



人物埴輪 (岡部地方出土)

目次

埴輪と「ヒムロ・ワータ」	2
埴輪は「埴」の埴	3
ヤマトと埴	4
ヤマトと埴の埴	6
埴の中の埴	7
和歌山と埴	8
和歌山と埴	10
和歌山と埴	11
和歌山と埴	12

岡部大：考古学資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06-388-1121)

阡陵 No.9



土偶(美手原北上市買取出土)

目次

埴輪と「ヒムロ・ワータ」	2
埴輪は「埴」の埴	3
ヤマトと埴	4
ヤマトと埴の埴	6
埴の中の埴	7
和歌山と埴	8
和歌山と埴	10
和歌山と埴	11
和歌山と埴	12

岡部大：考古学資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06-388-1121)

阡陵 No.7



金銅埴輪(美手原北上市買取出土)

目次

埴輪と「ヒムロ・ワータ」	2
埴輪は「埴」の埴	3
ヤマトと埴	4
ヤマトと埴の埴	6
埴の中の埴	7
和歌山と埴	8
和歌山と埴	10
和歌山と埴	11
和歌山と埴	12

岡部大：考古学資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06-388-1121)

阡陵 No.10



人物埴輪(美手原北上市買取出土)

目次

埴輪と「ヒムロ・ワータ」	2
埴輪は「埴」の埴	3
ヤマトと埴	4
ヤマトと埴の埴	6
埴の中の埴	7
和歌山と埴	8
和歌山と埴	10
和歌山と埴	11
和歌山と埴	12

岡部大：考古学資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06-388-1121)

阡陵 No.8



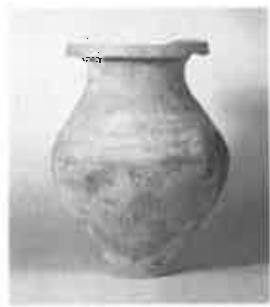
埴輪(美手原北上市買取出土)

目次

埴輪と「ヒムロ・ワータ」	2
埴輪は「埴」の埴	3
ヤマトと埴	4
ヤマトと埴の埴	6
埴の中の埴	7
和歌山と埴	8
和歌山と埴	10
和歌山と埴	11
和歌山と埴	12

岡部大：考古学資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06-388-1121)

阡陵 No.11



埴輪(美手原北上市買取出土)

目次

埴輪と「ヒムロ・ワータ」	2
埴輪は「埴」の埴	3
ヤマトと埴	4
ヤマトと埴の埴	6
埴の中の埴	7
和歌山と埴	8
和歌山と埴	10
和歌山と埴	11
和歌山と埴	12

岡部大：考古学資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06-388-1121)

●資料貸出

60・10 鑄銭資料 15点（下関市長府町長門鑄
銭所出土）狹山町立郷土資
料館へ

●『関西大学考古学等資料室紀要』（昭和60年3月B5版267ページ）第2号 目 次

茅と雉の羽一紀伊半島の祭と中国の古典に見える周代の祭一	横 田 健 一
古墳築造よりみた畿内と日向	網 干 善 教
古代のわが国における銅製錬技術の発展過程について	亀 井 清
近世絵画の特質について一初期狩野派の障壁画について一	山 岡 泰 造
清代鳥船と「長崎版画」	松 浦 章
隠処としての住居と接客一沖縄地方と奄美地方の比較一	森 隆 男
古地図資料の展示とその方法について一神戸市立博物館を例として一	三 好 唯 義
神田孝平書簡について	角 田 芳 昭
資料紹介『鏡板・杏葉』	米 田 文 孝
資料紹介『鋏形石』	徳 田 誠 志
昭和59年度博物館実習について	博物館学課程
フィジーにおける土器づくりの技術とその系譜	
一ピチ・レブ島西部シンガトカ川流域の事例一	橋 本 征 治
馬野繁蔵氏寄贈「瓜破遺跡採集資料調査報告」〔1〕	考古学研究室

編集後記

考古学等資料室が大学院学舎（岩崎記念館）4階へ移転して以来10年、関係者の皆様のご協力とご努力により資料室の充実と発展がはかられた結果、旧図書館本館跡（簡文館と命名）への移転が決まった。本年5月より事務室、実習室、図書室、展示室、収蔵庫等に全面改装が行なわれ、博物館施設への基礎造りが始まりました。

従来の約4倍強のスペースで2,000㎡強が与えられ、8月に移転作業を終了し、9月より新施設にて業務を再開しています。そして10月下旬には展示ケースも大学法人の特別のご配

慮により整った。今後は来年の関西大学創立100周年に照準を合わせ資料の展示が行なわれることになりそうです。これらの作業のため本号の編集が若干遅れました。

原稿は諸先生方と、特に文学部松浦章先生にお願いいただいた。その結果歴史学、考古学、西洋史学、東洋史学と歴史学全般について触れられることになった。ご執筆の諸先生方に対し感謝申し上げます。

表紙の「高坏形土器」は大阪府藤井寺市国府遺跡より発掘されたもので、優美な形態とその資料価値により、昭和39年重要文化財に指定された資料です。〔角田芳昭〕